

## 大貫先輩を追慕する

真柳 誠

大貫さんがこの1月28日に逝去してからもう一か月をすぎた。肝癌であと数か月の命だろうと聞いたのは昨年11月23日の神農祭だったから、そのとおりであったことになる。本人はとくに隠しだてする気もなく、この旨を皆につたえてほしいとのことで、彼らしいなと思った。今の感慨はというと、以前は親や師匠筋が亡くなっていたのに、ついに我々の順番になったのを教えてくれたということ。延命措置などジタバタしないのも潔かった。矢数道明先生も大塚恭男先生もそうだった。たぶん工藤訓正先生も。

大貫さんはわたしより四歳年長で、「一歳でも年上なら先輩だからな」と、いつも言っていた。それゆえ年下の同門をいつも真柳などとじか呼びするのが通例で、一方わたしは師匠筋だけに先生などの敬称をつけ、友人には年令無関係でさんづけしている。それでずっと大貫さんと呼んできたが、追悼文なのでタイトルだけは先輩をつけた。彼が矢数道明先生・圭堂先生の温知会に入門したのは1972年、わたしは1983年の入門ゆえ11年後輩だから。つまり大貫さんとわたしは1983年から37年間の交遊だったが、あつという間と感じるのは健忘のせいには違いない。

交遊を回想してみると、温知会の月例会の後や夏期合宿や忘年会での飲み会ばかり。昼間しらふで何かの仕事を一緒にしたこともあるが、日が暮れると必ず飲んでいた。大貫さんは楽しい酒なので、けっきょく楽しい記憶しかのこっていない。きっと誰もがそんな記憶だと思う。酒ばかりでなく、彼は軽音やゴルフ・釣りと趣味も多彩で、いい意味での遊び上手だった。よく人助けをしていたので、感謝する人も多いだろう。



写真を一枚紹介したい。これは1987年の第88回医史学会総会を、大塚恭男先生を会頭に白金の北里大学で開催し、総会後に伊豆まで一泊の慰労会に出かけた時のもの。前列右2が大塚先生、最後列左から小曾戸・小生・大貫・平馬の各氏となるが、みんな本当に若い。はっきりした記憶はないが、大貫さんにも医

史学会総会を手伝ってもらったのだろう。恥ずかしい思い出といえば、1989年の工藤訓正先生のご葬儀のとき。八王子の駅を降りて会場に着くと、受付にいた彼が「真柳、なんで白ネクタイなんだよ」と怒鳴る。当時は結婚式つづきで、礼服といえば白ネクタイばかりだったから。急いで駅にもどり、売店で黒ネクタイを買って事なきをえたが、以後この件では大貫さんに何度もいじられた。

わたしは1996年に茨城大学に転任してから温知会例会に出席する機会がすくなくなり、彼と会うのも年数回くらいになった。でも例会の講義で上京した時は、飲み会の後で大貫宅に泊めてもらったことが数回ほどある。そしてさらに深酒するのだが、わたしを自宅にさそった目的は二階を音楽スタジオ風に改築したのを見せたかったから。わたしは酔ったいきおいで一度ベースを弾いたことがあるが、「真柳あんがい上手いな」と褒めてくれる。当時はブルースギターをしていたので、すこしはベースもできたのだった。

去年の10月20日、友部和弘さんの『刺絡の道－三輪東朔から工藤訓正』の出版祝賀会で同席したが、大貫さんはまったく飲まないし元気もない。なにか変だなとは思ったが、わたしは翌朝から上海に行くことで頭がいっぱいだった。その約一か月後に肝癌だと知らされたので、それでああだったのかと思う。以後は都内に出る用事があれば、大貫宅にお見舞いに行くことにした。

最初の12月8日は台湾式のウーロン茶ゆで卵を自作して持って行ったが全然たべない。「なんでゆで卵？」という顔をしたので、「むかしは病氣見舞いに精力をつけるといって、卵をよく持って行ったでしょう」と話したが、どうも納得していない。それで二回目は焼きギョーザ、三回目はたこ焼きにしたが、まったく食欲がわかないとのこと。逆にお見舞品の酒をわたしにくれる始末。その酒はずっと会っていなかった古い友人からで、会いにきてくれたこと自体が嬉しいという。「むかしの彼女は？」と訊くと、例のニヤリという顔をした。今年1月18日の四回目は手ぶらだったが、もう食道の静脈瘤で水を飲むのもつらいとのこと。あとは都内に出る機会がなく、10日後の訃報となった。

2月3日の通夜ではお清めの液体もいただいたが、どうも心の区切りがつかない。それで都内で用事のあった2月18日に大貫宅で焼香させていただき、奥さんと話しながら遺影を前に持参のワンカップ大関で献杯した。「大貫さん、またいつか飲もうよ」。

(これを『温知会々報』と『日本刺絡学会誌』の双方に寄稿するが、ご寛容ください)